

122 マルチで機能性の高い漆（2022年8月4日）

前回、金継ぎは、陶芸作品に施される技法ではあるものの、漆芸（漆を使った技法）の一つであることをご説明しました（※1）。漆を使った工芸品である漆器は、16世紀半ばからヨーロッパの王侯貴族の間で流行し、数多くの漆器が日本や中国からヨーロッパへ輸出されました（※2）。ヨーロッパにはウルシの木が生えていないことから、18世紀のフランスでは漆に似た光沢を出すニスが開発され、そのニスを使って豪華な装飾が施された家具やパネルが作られたほど、漆はヨーロッパの工芸作品にも影響を与えました。現代において、フランスにおいて金継ぎのほかに漆がどのように使われているのか、漆職人のニコラ・ピノンさんにお話を伺いました。

ピノンさんは、工芸学校の学生時代に日本の漆と出会い、日本で漆職人の下で漆芸を習得しました。フランスに帰国してご自身の工房を立ち上げ、漆を使った工芸品の修復や創作を行っています。

漆とは、ウルシの木の幹から採取した樹液を精製したものです。一本のウルシの木から200ml程度しか採取することができない貴重なものです。9000年前の縄文遺跡から赤い漆が塗られた装飾品が見つかっており、その時代から塗料として漆が使われていたことがわかります。それ以前から、漆は接着剤として使われていたことも明らかになっています。漆には、防腐効果や抗菌効果があり、漆は古代からマルチな用途を果たすために使われてきました。

ピノンさんは、日本から取り寄せた漆を使っています。チューブに入った漆を開封した後は、劣化しないように冷蔵庫の中で保管しています。ウルシの樹液を精製する過程で金属や顔料を加え、黒色や朱色の漆を作ります。一口に黒色や朱色と言っても、濃淡の差によっていくつもの色に分けられます。漆職人は、作るものに合わせてこれらの色を使い分けています。



千年以上前から続く伝統的な漆芸のうち、最も有名なのは蒔絵です。蒔絵は、漆を絵具のように使って絵を描き、その漆が固まらないうちに金粉を蒔いて模様を作る方法です。蒔絵には、光り輝く貝を使った螺鈿が施されることもありま

す（右の写真は、蒔絵と螺鈿で装飾された尾形光琳作の国宝「八橋蒔絵螺鈿硯箱」）。

ピノンさんは、日本で乾漆という技法も勉強されました。乾漆とは、漆を使って型に何枚もの麻布を貼り付け、型から外した後にさらに漆を塗って仕上げる技法です。乾漆には、蒔絵や螺鈿のような華やかな装飾はありませんが、漆そのものの色と質感を味わうことができます。乾漆の場合は下地に木材を使いませんので、木材を使った漆器よりも軽くて自由に形を作ることができます（写真右）。私は、ピノンさんが制作中の乾漆を使ったラジエーター（暖房）を見て、とても驚きました。漆器は丁寧に扱わなければならない、食洗機はもつてのほか、使い終わったら柔らかい布で拭くだけで、水洗いもしてはいけないと教わりましたので、漆に耐熱性があると考えていませんでした。日本で、漆器は美しいものの日常生活で使うには高価なことから、廉価で扱いやすい人工塗料が広く使われています。しかし、現代社会において、先人が見出した漆の機能性の高さを見直すときが来ているのかもしれない。



Ecritoire décoré de huit ponts en poudre d'or sur nacre par OGATA Korin, 18^e
尾形光琳作「八橋蒔絵螺鈿硯箱」18世紀
出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



※ 1

121 金継ぎ

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100372956.pdf>

※ 2

71 日本の漆器とフランスの金細工のマリアージュ

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100210286.pdf>

72 南蛮貿易と漆器

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100213027.pdf>